

【①表現内容－B:材料・素材】

■動くアート

－ゴムの素材を使って－

近年、「動き」を取り入れたアートが注目されています。動くアートは「形・色」と「動き」からの発想や構想に着目した点が特徴的です。幼児や低学年の子どもの場合、箱でつくった車を手で押したり引いたりしている姿を見かけることがありますよね。子どもは、止まっているもののおもしろさよりも、動いているものの楽しさのほうを好むからです。

そこで、紙コップや牛乳パックなど、小さな容器の中に輪ゴムをフィルムケースに巻きつけたものを入れて、上下に動かして遊ぶ活動をさせます。ゴムを使うと、意のままにならない無作為な動きや多様な動きが起きるからです。すると、子どもはゴムの数を変えたり、フィルムケースに重りを入れたり、飾りをつけたりして、動く様子を変化させることを味わい始めます。

このような子どもに、集めてきた身近な材料を使って、つくりたいものをつくらせましょう。子どもは、「かわいい鳥がパタパタと羽ばたく」という、動きにまで着目したつくりたいものを考える発想が生まれます。そして、「パタパタさせるために、紙を細くしたり丸めたりしよう。」という構想が広がり、子どものつくりたい思いを一層引き出すことができます（写真1・2）。



写真1.「どんな感じかな？」



写真2.「ゴムを二つつけたら変な動きをしたよ！」

子どもたちが「〇〇が〇〇のように動くおもちゃをつくらしてみたい」という、つくりたい思いをはっきりさせたところで、「ちょっと聞いてねコーナー」をさせます。

「ちょっと聞いてねコーナー」とは、グループの友だちに自分のつくっている動くおもちゃを紹介し、友だちからよいところを評価してもらう活動のことです。

動くおもちゃを提示された子どもは、「形・色・動き」の視点をもとに、「色を上手に塗っているね。（色の視点）」、「つくりたいものがわかるようにつくっていてすごい。（形の視点）」、「重りをつけているから、グラグラするね。（動きの視点）」などの評

価を述べ合います。

自分の動くおもちゃを評価された子どもは、とっておきの動くおもちゃを完成させたいという思いと、自己有能感を高めていきます。そして、つくりたい動くおもちゃに近づけようとするために工夫を加えていきます（写真3）。



写真3. 魅力ある作品の数々

このようにして、とっておきの動くおもちゃを完成させた子どもは、動きを変える方法を使えばもっといろいろなおもしろい動くおもちゃをつくることができそうだという考えに変わり、もっとつくりたい気持ちを持ちます。

形や色、さらには動きを取り入れた本題材は、子どもの発想や構想を広げられるという価値を含んでいる点で、新学習指導要領の内容にも十分に対応している題材です。

いそ べ ま さ た か
(磯部征尊：新潟県新潟市立亀田小学校教諭)